
1 本の薔薇をあげる

緋揺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1本の薔薇をあげる

【Nコード】

N3573H

【作者名】

緋摺

【あらすじ】

人が住む世界とは別の場所、魔界に住む少年巖魔 ガンマ は、特殊な扉を通じて人の住む世界、表界へ落ちてしまう。そこで出会ったのは小さな女の子。巖魔の初めての友達、ハルは小さな希望をくれた。

ひとりぼっち

ずっとずっと1人だった。

寂しくて、誰かに話を聞いてもらいたくて、毎日大人達のところへ行ってはすぐに追い出された。

ある日少年は見つけた。

家から離れた小さな森の中、人ひとり通れるのがやつの木製の古びた扉。

支える力を失って、草の上にはたとと倒れていた。
あたりに建物の残骸はなく、人の住んでいた形跡もない。

「ついに見つけてしまったか」

「……！？ 大おじ！」

少年――柊^{ヒイラギ}巖^{ガンマ}魔は驚いて振り向いた。

かれてかすれた声の主は村の大おじだった。
年のわりに年中薄着をする大おじの服装は、本日は半袖に半ズボンである。

またどこから手に入れてきたか知らないが、蛍光ピンクに金のラメで『Happy!』とプリントされたTシャツで、若干12歳の少年は内心かなり無理があると感じていた。

深くシワの刻まれた肌は、今まで魔界を生き抜いてきた証だ。

巖魔はある小さな村で生まれた。

人間が住む表の世界―表界とは別に存在する裏の世界。
それが巖魔の住む魔界だ。

魔界と言っても環境は表界とさして変わらず、動物もいれば植物も育つ。

巖魔は魔族の村で生まれ、両親の知り合いに育てられた。生きるための狩りはもちろん、人間と万が一出くわしてしまった場合の対処法、魔族として自分の中に秘められた力の使い方まで、親に教わるべきことはすべて習った。

巖魔の両親は彼が生まれてすぐ、運悪く他の村の争いに巻き込まれ、命を落とした。

それがべつに寂しいことだとは思わなかった。

義理の両親は12年間、彼を本当の息子のように大切に育ててくれた。

村の大人達も優しくかったし、自然の溢れる村では遊び道具に事欠くこともなかった。

けど、巖魔^{ガンマ}は寂しかった。

村で一番小さいのはもちろん巖魔で、最も年が近い人でも25歳。木の枝でちゃんばらをしたり、鬼ごっこしたりは出来ない。

巖魔は友達欲しかった。

1人でいいから、一緒に笑ってくれる友達がいて欲しかった。

巖魔は太おじを見上げた。

太おじはなにかあればいつも飛んできてくれるし、面倒見もいい。

ちゃんばらを教えてくれたのも太おじだ。

あいにく、ちゃんばらは腰に響くらしく、あまり相手はしてもらえていない。

また何か新しいことを教えてくれるのかと思って、巖魔は太おじに尋ねる。

「み、見つけたって…何を？」

「それじゃ、ホレ」

大おじが指さしたのは、古い木の扉。

「コレ…ただの扉じゃないの？」

首をかしげる巖魔に、大おじはニヤリと笑ってみせた。

「あけてごらん」

何が分からないまま、少年は急かされてドアノブを掴んだ。
金色のノブはさびた感触もなく、少年の力でも難なく回る。

普通は引く扉を上を持ち上げるなんて、変なかんじだ。
引くと同時に、突然生暖かい風が巖魔少年を襲った。

下から上に突き上げる、魔界とは違うにおいのする風。
これは…

「向こうは今春の終わりの」

「向こう…まさか！」

「そのまさかじゃ。この扉は魔界と表界を繋ぐ…わし以外知らぬ秘
密の扉じゃ」

村1番の長老は人差し指を口元に立てて、最後だけ小声にして嬉し
そうに話す。

少年は目をまん丸にした。

普通、表界と魔界を繋ぐ扉は厳重に管理されて、どうしても必要な
ときだけ使うことが許されている。

いくら大おじが年寄りだといえ、まだボケてないはずだ。

巖魔は口を開いて、

「いいの？こんなところにとびらがあって」

思い切って聞いてみる。

答えは簡単だった。

「だめなら塞いでおる」

「…デスヨネ」

巖魔は扉の中をそつと覗いた。

もやがかかっている何も見えないけれど、草のおいに混ざって小さな声がする。

（子供の声…？）

巖魔は声をもつとよく聞こうとして、扉の中へ身を乗り出した。

「ねえ大おじ、表界に僕くらいの子っているの？」

大おじは豪快に笑う。

「アリの数ほどいるぞ」

なんだか生々しい例えが返ってきた。

（そっか…。じゃあ…）

とんっ

「へっ？」

一瞬の間に体が支えをなくして、真つ逆さまに表界へ落ちていった。手を伸ばしても、扉はもう届かない距離にまで離れてしまい、どうにもできない。

唯一頼れる人の名を叫ぶ。

「お、大おじ！」

「おお、たまには社会勉強してこい。後で迎えに行くぞ」

「ええ！！」

巖魔を突き落とした老人は、魔界からにこやかに手を振り、そしてゆっくり扉を閉めた。

（…帰れなくなる！）

空を切つて落ちる体は、風に流されていつの間にか扉を見失った。予想外の言葉と現実離れた出来事に、巖魔の心臓がどくどくと脈を打った。

今の巖魔の力では、くやしいけど何の役にも立たない。

半分諦めて、巖魔は流されるままに身をゆだねた。

こういうとき焦ってはいけないと父さんに言われた。

体が落ちる。

表界でひとりぼっちになって、巖魔はいつの間にか意識を手放していた。

ひとりぼっち（後書き）

はじめまして！

バリバリのファンタジーです。

もし楽しんで読んでいただけたなら、こんなに嬉しいことはありません！！

稚拙な文章ですがどうぞ見てやってください。

そして、読んでくださった方、本当にありがとうございます…！
…幸せ者ですつ。

ともだち（前書き）

覗いてくださってありがとうございます。

もし…少しでも共感できたならっ…コメントをくださいっ！！（
切実）↑

生きるーじゃなくて、書く力を私にっ！！

ともだち

巖魔^{ガンマ}は夢を見ていた。

自分が表界に繋がる扉を見つけて、大おじに突き飛ばされて、空中で意識を失う夢。

しかもその夢には続きがあって、今度は誰かに腕や顔をつつかれている。

やけにリアルな夢で、鬱陶しい。

頬をつつく手を払いのけて、寝返りを打つ。

すると、今度は反対側の頬をつつかれた。

「んー、なんだようー!!」

「おきた!」

「え?」

完全に目が覚めた巖魔が体を起こすと、笑顔と黒髪が目に入った。黒のスカートにピンクのTシャツ。

目の前の小さな女の子は、大おじとなんら変わらない格好をしている。

靴は履いていなくて、裸足で巖魔の隣にちょこんと座っていた。

「ねむたかったんだね」

「に…」

「に?」

「人間だ!!」

巖魔は座って驚いたまま後ずさりした。

「ああ、まって!!」

女の子がそのまま嬉しそうに追いかけてきた。
巖魔はさらに後ろに逃げた。

(あ…)

背中が壁に当たった。

硬そうで、殴ってもびくともしなさそうだ。

女の子は座ったままの巖魔に思い切り抱きついた。

(わわわ!につ、人間の女の子が!!)

「あなたはにんげんじゃないの?」

しがみついたまま巖魔を見て尋ねた。

巖魔は慌てて目をそらした。

自分が魔族と知って騒がれたら大変だ。

魔族は人間から嫌われている、と両親から教わった。

魔族は人間よりも力が強い。

髪の毛や目の色も様々で、体質も異なる。

だから魔族はずっと人間に嫌われてきたらしい。

「えと…、僕は…」

「うん」

「…」

巖魔は何も答えられず、唇をかむ。

不思議そうに顔を見上げていた女の子は、抱きついたまま、また笑った。

「ひみつ？」

「…うん、秘密。ごめんね？」

「いいよ！あのね…」

「何？」

女の子は巖魔のごわごわするＴシャツに顔を埋めた。

「…なんでもない！そうだ、みて！！」

女の子は巖魔から勢いよく離れてくるりと回れ右をすると、巖魔が声をかけるまもなく駆けだした。

小さな体はすぐに生い茂る植物の中に紛れる。

よく見れば、たまたまどこかの家の庭に落ちたらしい。

植えられた木々は春の日差しを遮って、庭に木陰を落とす。

色とりどりの花が咲いているのは、表界が魔界と同じ暖かな季節だと言うことを表していた。

振り返ると、もたれていた壁が目に入る。

「高っ…」

何メートルあるんだろう。

伸びた枝が視界を遮っていてよく見えないけれど、普段見慣れている2階建てよりはるがいぶん高い。
女の子の声がして、巖魔を呼ぶ。

「こっち！」

こっちってどこだ？

「みえるでしょ？」

見えません。

手、あげてよ。

「はしっこ！」

視線を庭の端に移すと、かろうじて黒髪が見えた。

プランターに植えられている大型の植物のむこうで、頭がぴよぴよこ動いていて、おかしかった。

伸び放題の草をかき分けて進むと、妙に腕がちくちくする。

「とげとげあるよ」

今更言われても遅くて、動く度にちっちゃなとげが地道に攻撃してくる。

それでも巖魔にはたいした怪我じゃなかった。

庭の端まで来て目の前に広がったのは、小さな薔薇の群生。

つばみは閉じたままだった。

「さかないとさみしいよね…」

この薔薇が好きなんだ。

巖魔はそう思った。

なんとなく抱きしめたい衝動に駆られて、女の子の頭に手を伸ばす。大おじも母親も、寂しいときは無言で抱きしめてくれた。

なぜかはわからないけど、誰かの腕の中にいることで安心できた。

「…ありがとう」

しばらくしてぽつりとつぶやいた女の子は、巖魔の腕の中で小さく笑う。

その笑顔につられて巖魔も笑い返した。

こんなに優しい気持ちになったのは久しぶりな気がした。

ともだち（後書き）

新しいコが登場しました！！

ハルは大好きなコです。

みんな仲良くしてやってください。

ハル（前書き）

大変読みにくい文章だと思います。
ブライングは読んでからにしてください。
おてやわらかに！

ハル

女の子の名前はハル。

歳は4歳で、もちろん表界生まれ表界育ちだった。

「んー、たぶんいない」

「え!？」

両親について聞くと、ハルはいないと即答した。

「じゃあ…」

「れんちゃんといっしょだから、さみしくないよ？」

どうやら『れんちゃん』なる人と一緒に暮らしているらしい。

「れんちゃんはいつもおしごとがあるから、ハルはここにいるの」

「え、その『れんちゃん』て人って、いくつ…?」

ハルは計算が苦手だったみたいで、ガンマ巖魔の問いに眉をひそめた。
口をぽかんとあけたまま、指を広げて数え始める。

「…」

「あ、まあ…無理なら別に…」

「むりじゃない!!」

負けず嫌いなところが自分にそっくりで、巖魔は思わず笑ってしまった。

「ハルより10おおいっていったから…」

「…14だね」

「あっ」

言ってから、しまったと思った。

ハルが唇をとがらせてすねる。

その顔がまたおかしかった。

「あーわらう!」

「…つくく、ごめん!あんまり可愛いから」

正直に言うと、ハルは笑って許してくれた。

「ねえ、がんまくんはいくつ?」

「えと…12歳かな」

ハルはその答えに目を丸くする。

そんなに驚くことかと巖魔は目をぱちぱちさせてハルを見た。

と、次の瞬間、巖魔の予想を裏切ってハルが満面の笑みを浮かべた。

「れんちゃんとおなじくらい！んー、てことは…がんまくんおじ」とは？」

え！？ 仕事？

「…ま、まだしてません」

ハルはさっきよりもっと目を丸くした。

「じゃあ、まいにちなにしてるの？くんれん？」

「訓練？『れんちゃん』は訓練なんかするの？」

ハルは笑顔で頷いた。

どうやら毎日何かの訓練をしているらしい。

表界はへんなどころだと巖魔は思った。

だからハルはひとりぼっちで庭にいるんだ。

じゃあ寂しくないのか聞くと、ハルはきょとんとして首をかしげた。悔しいけど、その表情がめちゃくちゃ可愛い。

「さみしくないよ！ここにいれば！」

ハルは笑っている。

それは見ればわかる。

でも…。

本当はそうじゃない。

こんな小さい子が1人でいて、寂しくないわけがない。

「ねえ、ハル」

大おじごめん。

「また時々…ここに来ていい？」

思いがけない問いかけに、ハルが目を輝かせた。

「うん、待ってる！！」

ハルと約束をして庭を出ると、高い建物の前で大おじが待っていた。ニヤニヤしているとところを見ると、すっかり見られていたみたいだ。恥ずかしくてうつむいたまま、巖魔が近寄ると、頭を1回なでた。

「社会勉強になったか？」

また来たくなつたなんて、言いいにくい。

「ま、時々…ものすごーく時々なら、連れてきてやってもいいぞ」

「本当！？」

「肩たたき100回で」

どこまでもセコいじじいだ。
でも、

「…お願いします」

会いたい。

あの顔見たら、来ないなんて言えない。

巖魔が、何故か大おじの後ろに現れた扉を抜けると、いつもどおり

魔界の生暖かい風が頬をなでた。

ハル（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！！

ところで…大おじつて、案外恋愛話好きだと思いませんか？

例えば。。ちゃんの告白シーンを何故か事細かく知っている…。
いわばのぞき名人ですな。

赤い花（前書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。
あともう少しだけ、おつきあい願います。

赤い花

会いに行くと、ハルはいつも庭で1人で遊んでいて、^{ガンマ}巖魔を見つけて嬉しそうに駆け寄ってきた。

30分だけ、と大おじに決められていたけど、その貴重な30分の間にハルは庭にある植物について教えてくれた。

ハルのお気に入りはやっぱり薔薇で、他は難しいけどこれだけは自分で毎日手入れしているらしい。

巖魔と話をしているとき、ハルはいつも笑っていた。

小さくて優しい笑顔を見ると、嫌なことが全部吹き飛ばす気がした。

巖魔、よく聞けよ。

ハルの庭からの帰り道、大おじの唐突な言葉に巖魔はぎくりとした。神経を逆なでするような、嫌な感じがする。

「今回限りで、扉をな…閉じることにしたのじゃ」

巖魔の直感は当たった。

「な、なんで…」

いきなりなんて納得できない。

巖魔は黙りこくる大おじを責め立てた。

「簡単に言つと…おまえの正体があの子にばれてしまつては危険だからなのだ」

「正体って…僕が魔族の子だってこと!？」

そうだ、と大おじは頷く。

「そんな…大丈夫だよ…たぶん。ハルは、ハルは言わなくてもちゃんとわかってくれてる!!」

わからんぞ、あの子もまだ小さいし、いつばれるか。
大おじは難しい顔をして言った。

「ハルは…だってハルは…」

「あの子がなんじゃ？」

「ハルはいつだって待ってるんだよ！　ひとりぼっちで…」

「おまえが行けばそれは変わるのか？」

「…それは」

確かに変わらない。

巖魔はほんの一時そばにいてやれるだけだ。
もしかしたら、逆にそれが辛いつてこともあるかもしれない。

「巖魔」

巖魔はそつと目を開けた。

目の端にたまった涙を大おじが優しくぬぐう。

「巖魔よ」

「……はい」

頭をなでて、大おじは微笑んだ。

「辛いことを言っているかもしれないがな、大丈夫じゃ。あの子は
大丈夫じゃよ」

どうして、と聞く前に大おじは答えた。

「あの子は強いぞ、巖魔。わかるじゃろ？おまえと同じだ」

「同じ…？」

「少々のことじゃへこたれん」

言い返そうとする巖魔を制して、大おじは少年の体を元来た方へく
るりと回転させた。

「3分だけ、待ってやる」

それは、別れの挨拶をしてこいということだった。
巖魔の唯一の“人間”の友達に。

— ∞ + ∞ —

「ハル…」

再び戻ってきた巖魔を見て、ハルは目を丸くした。

「どつし…」

そのまま近づくと、巖魔はハルをぎゅっと抱きしめた。
最初はきよときよとしていたハルも、次第に巖魔の腕の中で静かになる。

「ハル…」

「んー？」

巖魔はハルをゆっくり離すと、泣きたくなるのをこらえて笑った。

「また今度…薔薇見せてね」

巖魔を見上げるハルが、次の瞬間何も言わずきびすを返した。

「ハル!？」

「まってて!」

駆けていく小さな体が草木の間から時々見える。

少しして慌てて戻ってきたハルのほっぺには小さなかすり傷があった、血は出ていなかったけど痛そうだった。

「あげる!」

突然巖魔の視界がぼやけた。

（やつちゃった…）

泣かないって決めてたのに。

巖魔は涙をぐいっとぬぐった。
ハルが巖魔に差し出したのは、

――1本の薔薇――

ハルが大切に育てて、やっと咲いたばかりの赤い花だった。

「あげる!!」

ハルはもう一度言つと、トゲに注意しながら巖魔の手のひらに花をのせた。

「…あ、ありがとう。ハル…僕…き」

いきなり風が吹いた。
とっさにハルがしゃがむ。

『巖魔、時間じゃ』

風にのまれながら大おじの声が聞こえて、途端に目の前が真っ暗になる。

落ちているような上昇しているような訳の分からない感覚のなかで、誰かにどんだんひっぱられた。

意識がなくなるその瞬間に、巖魔はハルの笑った顔を見た気がした。

赤い花（後書き）

毎回つたない文章で…（泣

…でも、ここまで読んだなら、次もお願いします!!
さあ、NEXT クリック!! 笑

春風（前書き）

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。
胸がいっぱいです。

春風

魔界の風は、正直ぬるい。

表界の風はあんなに爽やかなのに、なんで魔界のはぬるいんだろう。
巖魔は木の上でそんなことを考えた。

「おい、が・ん・ま！！何で木の上にいんだよ」

「あいかわらずね」

呼ばれて巖魔は下を見る。

つい最近出来た友達は、別の村からやってきた同じ歳の同志だ。

これまたなぜだか分からないが、巖魔の育ての母親である花鈴も、
下から見上げて笑っている。

いい年のわりに見た目は若い。

もつとも、老けたなど言えば、巖魔はその瞬間に勘当されるかもしれないが。

「なんで母さんまでここに？」

友人はいいとして、母がわざわざ木に登った巖魔を見に来るのはおかしい。

「大おじに呼ばれてるのよ、あなたと一緒にだね」

もはや年齢は分からないが、毎年しぶとく生き延びている大おじは、扉を閉じてからも言い遊び相手になってくれている。

「もう時間？」

「そうね」「そうだな」

2人が同時に答えて、巖魔に根で促した。

「降りろ」

「…はい」

木を降りた巖魔は2人と並んで歩き出した。

今度は何の呼び出しだろう。

また大おじの突拍子もないアイデアを聞かされるのかもしれない。

— ∞ + ∞ —

庭には植物が所狭しと植えられていて、どれもきちんと手入れされていた。

見渡すと、庭の隅の薔薇が目に入る。

「あ…」

ちょうど咲き始めを迎えた赤い薔薇の隣には、白い薔薇とピンクの薔薇が植えられていた。

親子みたいに自然に寄り添う丸い膨らみが、季節の訪れを教えてくれる。

10年たつてすっかり伸びた身長は、あの時は負けていた小さな茂みの高さを追い越して、薔薇のある庭の隅まで楽々見えるようになった。

柔らかな風はあの時のままだ。

「珍しい客人だね。表界の庭もきれいだろっ?」

突然の声に振り返ると、1人の若い男性が庭に面した建物の窓から身乗り出して笑っていた。

「ハルがいつも手入れしてくれるから、いつ来てもいい風に出会えるよ」

そうだ。

「ハル!ハルは元気か?」

黒神の男性は青いフレームの眼鏡を上げながら、窓枠に肘をつく。

「気になる…よね」

「うん」

窓から手を伸ばして白い花に触れながら、彼はそうだなあ、と言った。

「ハルはね、今ウチの組織で働いてもらってるんだ。いい腕だよ」

組織?そっういえば…。

「あの…もしかして…『れんちゃん』?」

「あれ?僕のこと知ってるんだ?」

「ハルから…」

『れんちゃん』はニヤリと笑った。

「そうか、なら話は早い」

ねえ、巖魔くんと彼は問いかける。
そして巖魔を魔の罠に誘った。

「ハルのそばにいたい？」

そんなの…。

答えはもう決まってる。

1本の薔薇をもらったときから、ずっと。

春風（後書き）

楽しんでいただけましたか？

もしよければ、「春風」の下の方も覗いてみてください。
完全に私の趣味ですが（笑

現実（前書き）

現実って、甘くないですよね…。

現実

巖魔^{ガンマ}と煉^{レン}は廊下を歩いていた。

きれいな建物だ。

巖魔はここが好きだった。

「この部屋でハルト、君の新しい同僚が待ってるよ」

新しいっていつでも、もう顔見知りだけど、と煉は付け加えた。

「げ…」

顔見知りって絶対あいつだ。

この組織に入った当初からの腐れ縁。

人間のくせに妙に勘のいいところは、わりと気に入ってるんだけど。
白いドアの前で煉は巖魔の肩に手を置くと、意味ありげに頷く。

（ま、いいか。悪いやつじゃないし）

深呼吸して、巖魔はドアを開けた。

「こんにちは…!!」

パン、パン!!

巖魔の目の前で盛大にクラッカーが鳴る。

クラッカーを両手に持って、ショートの黒髪の女の子が笑った。

「…ハル？」

「はい、はじめまして！！今日からよろしく！！」

え。

…ハジメマシテ？

「えーと、えーと。ヒイラギンマ 柊巖魔だから…あだ名はひい君で！！」

ちょ、ちよつと待てよ！！

展開についていけねえぞ！！

「煉ちゃん！！」

慌てて巖魔が振り向くと、煉は親指を立てて、

「グットラック…！！」

小さく呟いた。

そしてそのまま、何ごともなかったかのように部屋を去っていく。

……おい。

肩叩いたのはそう言う意味だったのか。

何かおかしいなーとは思ったけど…。

ハルは覚えてないのか俺の事！！

ハルが巖魔の事を思い出すのは、もっとずっとあとの話。

現実（後書き）

最後まで読んでくださった方、本当に…本当にありがとうございました！！

面白いかはともかく（オイっ！）書くのはとても楽しかったです。

Special Thanks For My Friends
！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3573h/>

1本の薔薇をあげる

2010年12月9日14時36分発行